

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ  
Quarterly magazine FOYER  
2023 spring

016

つながる、ひろがる、あつまる  
ほわいえ

# FOYER

Special feature  
熊本県立劇場開館40周年記念対談  
藤原道山×姜尚中  
(尺八演奏家) (熊本県立劇場館長)

山田和樹指揮バーミンガム市交響楽団  
演奏家派遣アウトリーチ事業

国指定・ユネスコ無形文化遺産登録記念  
野原八幡宮風流

日常に、劇場を。



Life with a Theater.



熊本県立劇場

KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】  
公益財団法人 熊本県立劇場  
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971  
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】  
株式会社 ジャム  
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017  
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2023 spring 発行日:2023.3.20 ※掲載内容は2.28現在のものです。



ONE PIECE×人形浄瑠璃 清和文楽  
『超馴鹿船出冬桜』総合演出

# 藤原道山

尺八演奏家

## 姜尚中

熊本県立劇場館長

熊本県立劇場開館40周年記念企画として、11月5、6日に第64回熊本県芸術文化祭スペシャルステージ「ONE PIECE×人形浄瑠璃 清和文楽『超馴鹿船出冬桜（ちよっぱあふなでのふゆざくら）』」を上演しました。

人気漫画と熊本県重要無形文化財をコラボさせる意欲的なこの公演、総合演出を手掛けたのは尺八演奏家の藤原道山さんです。藤原さんは演奏家として国内外で活躍する一方、これまでも熊本県芸術文化祭オーブニングステージ「邦楽」「民謡」など、県劇の制作公演を成功に導きました。初演を鑑賞し「素晴らしいの一言に尽きる」と絶賛した姜尚中館長と藤原道山さんに、今回の公演について語り合っていました。

また、教育者としても共通点を持つふたり。舞台芸術界の人材育成に関する課題と展望、またそこで劇場が果たす役割についても意見を交わしています。

### 清和文楽を中心に熊本の芸能がひとつになった

『超馴鹿船出冬桜』の感想を。

**姜** この作品は非常に実験的な試みです。人形浄瑠璃は本来コンパクトなものです。踊りや演劇など人間の演技と合わせ、空間の構成が重層的になっていました。また、計算しつくされたタイミングで入った藤原さんの演奏も見事。観ていた方々が我を忘れ、会場全体が唸るようだったのが印象的でした。

**藤原** 構想から4年ほどかかりましたが、ようやく実がなつてほっとしました。清和文楽を中心に、熊本の伝統芸能、県民の皆さんの思いがひとつになったのが私としては嬉しかったです。その結果として、姜館長がおっしゃるよう皆さんに響いたのであれば、やった甲斐があったなど。

—宇土の太鼓や山鹿灯籠など、熊本の伝統芸能を盛り込まれました。また、藤原さんが作・監修された音楽に熊本の民謡「おてもやん」が織り込まれていたのも印象的です。どのような意図でこういった演出をされたのでしょうか。またその成果はいかがでしたでしょうか。

**藤原** 地元の伝統芸能を観たことがない、という人は意外に多いように思います。近すぎて気づいていなかった芸能の魅力を知っていただきたいということがありました。また、伝統芸能はそれぞれに力がありますが、それらが集まることで相乗効果によってさらに大きな力を持つ、またお互いに影響し合う機会にできれば、という思いもありました。

**姜** 動的な太鼓としっかりと静的な山鹿灯籠踊り、そのほかにいろいろな要素をうまくコーディネートされていました。

**藤原** 作品に登場した山鹿灯籠ですが、あの灯籠を頭上に載せ踊り歩くスタイルは1955年頃から始まった比較的新しいもので、それが今では伝統化しています。最初は何でも新しく、継承されるにつれ伝統になっていきます。今回の表現も今は新しいものですが今後また次の世代では伝統的なものになっているかもしれません。

**姜** 伝統というのは常にイノベートされていきます。伝統芸能もその居留区に留まってしまうのではなく、そこから出るエネルギーを持つことが重要でしょう。

©尾田栄一郎／集英社







尺八演奏家：藤原道山

東京藝術大学卒業、同大学院修了。芸術選奨文部科学大臣賞をはじめ多数の賞を受賞。伝統音楽の伝承と共に、ユニット活動や舞台音楽など多岐にわたる活動を展開中。東京藝術大学音楽学部准教授。熊本県芸術文化祭オープニングステージ「邦楽」の音楽監督、「民謡」の総合演出を務める。

## デジタル世代の若者たちが 実演ならではの 素晴らしさを感じられた

『超馴鹿船出冬桜』には多くの子どもたちを含む約200名の一般市民が参加しました。藤原さんが手掛ける舞台には若い人材の起用が目立ちますが、そこに込めた思いは。

藤原 文化というものは、ある意味伝言ゲームのようなもので、それぞれの人々がそれぞれのフィルターを通して見て、感じて、つなげていくものです。若い世代の方々に、何かを見て感じる状況をつくってあげたいというか、そういう機会に一緒にいてもらいたいん

です。共有した経験を次につないでいただきたいと思っています。コロナ禍でそういった状況が分断されてしまったところがありますが、だからこそ大切さを再認識しました。その思いは、今回の舞台の力になりましたね。

また、若い方々のパワーと歳を重ねた方々の経験とは、互いによい作用を及ぼすものです。それは観ている皆さんに伝わりますので、舞台を作るときには常々大切にしています。

姜 劇場の空気感―、衣装や照明の色彩や音、観ている人々の息遣いなど、これはデジタルで再現しようにも叶わないものです。コピーしようにもできない。デジタル世代の若者たちが実演ならではの、一期一会の素晴らしさを感じられる機会に、この公演はなっただけだと思います。



## 一期一会の体験を提供する劇場は 今後ますます重要な役割を担う

―藤原さんは2022年に東京藝術大学音楽学部の准教授に就任、後進の育成に力を注いでいらっしゃいます。県立劇場も舞台芸術にかかると人材の育成をミッションに掲げているところですが、この業界の人材育成に関する課題と展望、また地域の劇場に期待する役割をお聞かせください。

藤原 配信動画などいろいろなことが学べる時代にはなりませんが、それは一方通行でしかありません。対面で教わるときには、自分が求めている以外の余白部分に実は大事な要素があり、それが提示されることがあります。今回の対談もそうですが、やはり

直に対峙しないとわからないことがあるのだなと実感しています。また、生の演奏などを知った上で映像を観ると、映像しか知らないのにも大きな違いがあります。生を知っていると、映像でも補完して聴く、あるいは観ることが出来ます。

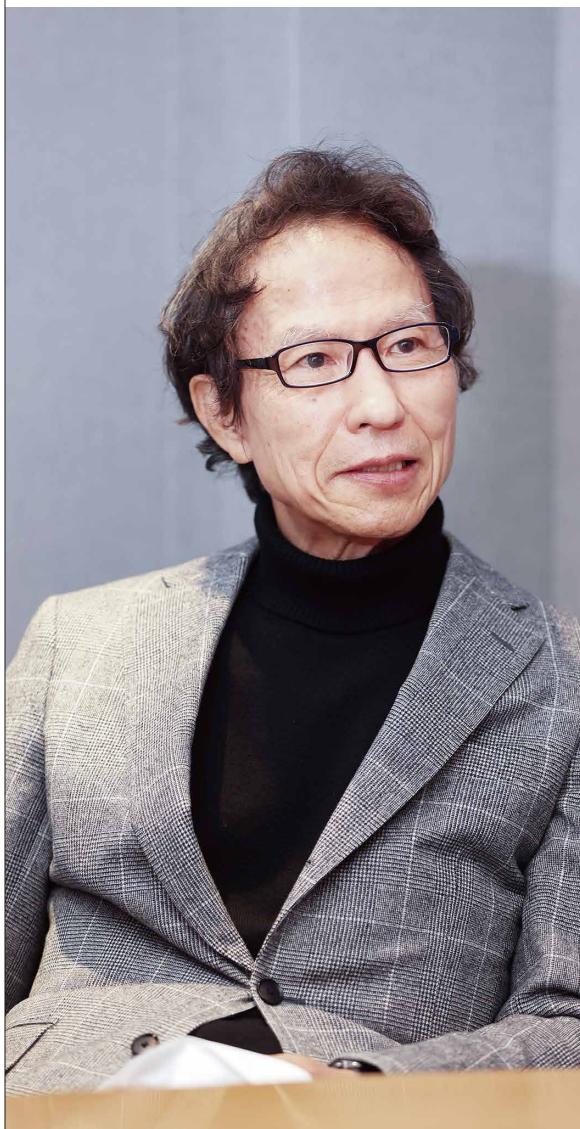
姜 ネット通販などでは自分がこの本を買おうと決めて注文しますが、リアルな書店では買おうと思った本の横に手を伸ばすことがあります。そこに自分が望んでいた以上の学びがあることがある。先ほど「余白」とおっしゃった、それは非常に大切なものだと思います。

アートではマイスターと弟子のよう

な関係性が非常に重要です。徒弟制度は非常に古い面もありますが、学校教育的なシステム化されたやり方では伝えきれないものも伝えられます。そういった関係性を次の世代でもつくる必要があるのではないのでしょうか。

藤原 先ほど館長が一期一会という言葉を使われましたがまさにそうで、生の舞台を観る機会や、一期一会の体験を提供する劇場というのは、今後もっと重要な役割を担っていくのではないかと考えています。

また、生の演奏や舞台は、繰り返し観たり聴いたりするうちにわかってくるものがあります。自分が何を好きなのかということは、観た体験があって育っていくのかもしれない。劇場には古いものや新しいもの、さまざまなバランスよく発信していったらいいです。



熊本県立劇場館長：姜尚中

1950年、熊本県熊本市に生まれる。国際基督教大学准教授、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授、聖学院大学学長などを経て、現在東京大学名誉教授、鎮西学院大学学長。2016年1月より熊本県立劇場理事長兼館長に就任。



## Highlight

ヤマカズが県劇に帰ってくる！

山田和樹指揮 バーミンガム市交響楽団

「ヤマカズ」こと、山田和樹率いるバーミンガム市交響楽団の熊本公演開催が決定しました！

2015年から2017年の3年間、熊本県芸術文化祭芸術監督として芸術の新たな形にチャレンジしてきたマエストロ。2023年4月より首席指揮者兼アーティスティックアドバイザーに就任するイギリスの名門オーケを率いて6年ぶりに待望の来熊です。

プログラムはブラームス「ヴァイオリン協奏曲」とエルガー「交響曲第一番」。中でもエルガーの1番は、マエストロが「エルガーはイギリスの誇りを表現している作曲家。この作品を演奏するときのオーケストラの表情、奏でる音楽は他にはない」と語るほど、オーケストラにとって重要な作品です。さらに、ベルリンフィルのコンサートマスター、榎本大進を迎えてのブラームスと、充実したプログラムを熊本で聴ける絶好の機会にぜひ劇場まで足をお運びください。



©CBSO and Kazuki Yamada - Benjamin Ealovega (May 22)

### ◎公演情報

日時 2023年6月23日(金)開場18:15、開演19:00  
会場 熊本県立劇場コンサートホール

### チケット販売中

【全席指定】  
SS席12,000円  
S席10,000円  
A席8,000円  
B席6,000円

※25歳以下、障がいのある方は3,000円引き  
※未就学児の入場はご遠慮ください  
(有料託児サービスあり:要事前申込)

### 出演

指揮: 山田和樹  
ヴァイオリン: 榎本大進  
管弦楽: バーミンガム市交響楽団

### プログラム

ブラームス: ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品77  
エルガー: 交響曲第一番変イ長調作品55



榎本 大進 ©Keita Osada (Ossa Mondo A&D)

山田 和樹

©Kazuki Yamada - Benjamin Ealovega (May 22)



子どもたちの反応から「音楽は伝わる」と確信するようになった若木さん

## Highlight

熊本県立劇場  
演奏家派遣アウトリーチ事業

熊本県立劇場では、2004年度から県内各地の学校や施設を対象にアウトリーチ活動を展開しています。市町村と共催し、授業のひとコマや施設の一室を利用した演奏会に演奏家を派遣し、生の演奏にふれる機会をお届けしてきました。2009年度からは、オーディションによって選ばれた県内在住、もしくは県出身の登録アーティストが活動に参加しています。2年間の登録期間を設け、その期間はアーティストのアウトリーチ活動育成期間となっています。2年間の活動を通して、授業の組み立て方、演奏曲のセレクト、プログラム作成、指導の方法などを経験すること、自分なりのノウハウを蓄積してもらいます。登録期間の後、協力アーティストとして引き続きアウトリーチ活動に参加しているアーティストも数多くいます。

2021・2022年度登録アーティストである、オーボエ奏者の若木麻有さんは、ご自身の子どもが産ま



ピアノ伴奏を担当したのは藤本史子さん。  
若木さんとは長いつきあい

れたことがきっかけで、「演奏を通して子どもたちに伝えたい」という思いが強くなり、このアウトリーチ事業に応募したといえます。「アウトリーチ活動を通じ、オーボエの魅力が伝わる曲の順番を考えたり、伝え方を工夫したり、子どもたちの反応を見ながら私の方が勉強しています」と、事業に参加した意義を語ってくれました。演奏だけでなく、オーボエの楽器の成り立ちや、仕組みを魅力的に伝えることに注力しているといいます。今後は協力アーティストとして、地域の幅広い世代に音楽を届ける活動に参加したいとのこと。若木さんの演奏を聴いている子どもたちの表情を見ていると、20年もの間県立劇場から地域に飛び出し、演奏をお届けしてきた事業が、着実に届いていることを実感します。

### 演奏家派遣アウトリーチ事業 2024・2025 年度登録アーティスト募集

熊本県内各地の小学校、中学校、高校をはじめ、病院、福祉施設への演奏家派遣を行う、アウトリーチ事業。  
今後さらにアウトリーチ事業の発展を図るため、2024年度から2年間、事業に参加いただく登録アーティストを募集します。

【スケジュール】※予定(今後の詳細は県立劇場のホームページで順次お知らせします)

■2023年8月…2024・2025年度登録アーティスト募集開始

■2023年9月上旬…一次選考…書類・音源をもとに選考(9月中旬合格者発表)

■2023年11月中旬…二次審査…演奏と面接による審査(11月下旬合格者発表)

■2024年1月・2月頃…研修会(2回にわけ、計6日間の研修を予定)

※二次審査では、アウトリーチの実演を想定した1、2曲の演奏と  
演奏曲目についてのトークを15分以内で実施



## 野原八幡宮風流 (のばらはちまנגうふうりゅう)



緩急のある動きが、とても優雅な野原八幡宮風流。全国41件の風流踊で、ユネスコ無形文化遺産として登録が決定

**770年以上  
口伝で継承される  
民俗芸能**

熊本県荒尾市の狐屋(こまや)、野原(のばら)、川登(かわのぼり)の3つの地区に伝わる野原八幡宮風流。起源は鎌倉時代の悪魔祓いといわれ、現代まで770年以上もの間、口伝口授で継承されてきた民俗芸能です。

毎年10月15日、野原八幡宮大祭通称のばらさんで、獅子頭に見立てた笠を着け、太鼓と舞いを披露する2人の男児の「打手(うちて)」と、地区の成人男性による「篠笛」と「唄」で構成された太鼓踊りが披露されます。その舞いは、華やかさと優雅さ、そして笛と唄、太鼓、舞いと調子が、見る人の心をつかみます。3つの地区の舞いや唄、衣裳などは、それぞれ口伝による継承のため、少しずつ違いがあり、のばらさんの本番では、狐屋、野原、川登の順番で、3つの地区の風流が奉納されます。

2015年には、国指定の無形民俗文化財に選出され、さらに2022年11月、この野原八幡宮風流を含め、全国41件の国の重要無形民俗文化財からなる「風流踊(ふうりゅうおどり)」が、ユネスコ無形文化遺産として登録が決定しました。

**民俗芸能が中心の  
地域の連携と  
コミュニティ**

野原八幡宮風流の特色は、それぞれの地区から小学1、2年生の男児2人が打手として選ばれ、6年間、毎年のばらさんで舞いを奉納する役割を担うことです。最初は小さく、太鼓の打ち方、舞いもよく覚えられなかった子が、一年ごとに舞いに優雅さが身につき、太鼓も力強くなり、成長する姿が見られるといいます。

「昔からの決まりで、6年間打手を経験した子が、その次に選ばれた打手を指導する「師匠」となります。それが脈々と受け継がれ、地域にとってなくてはならない存在となっています」と語る野原地区の代表である西田耕陽さん。打手の衣裳である笠は毎年新調され、その頭に直接ふれる部分は、打手の親が3週間もの時間をかけ、藁をたたいてやわらかくしたものが使われています。地域の小学校では、社会科の授業で野原八幡宮風流のことを勉強し、最後にはボランティアガイドを務めるようになります。地域、家庭、教育がうまく連携した取り組みが、民俗芸能を後世につなぐために一丸となるコミュニティをつくりだしています。



地域の中心にある野原八幡宮



小学2年生の時に打手に選ばれた濱崎琥晴くん(右)と三上大心くん(左)。「風流のことを知らずに入って、5年間でどんどん上達して、大変でしたがやってよかった」(琥晴くん)「自分が打手の間に世界遺産にもなって、うれしかった。次は師匠として教える役割です」(大心くん)

## 中山芳保会(日本民謡) 動きと心情の表現で、 民謡の輪(和)を伝えていきたい

日本民謡は、大衆の文化。労働者のなんらかの作業を表現した踊りが多く、船の漕ぎ方、木の伐り方、重いものの運び方など、力を入れるタイミングや、腰の入れ方、身のこなし方を知ることがとても重要だといわれています。労働者の動きをイメージするだけでなく、身に入れることで日本民謡は生き生きとしたものになります。

今年で40周年を迎える日本民謡「中山芳保会」の中山芳保先生は、このリアルな動きを通して見えてくる風景をもっとも大事に考えているといいます。さらに、民衆の心のありよう、心情を踊りで表すことを、芸の中心に据えています。中山芳保会は、長崎に本部を置く中山流民俗舞踊研究所の一会。民俗舞踊の中でも、天草の牛深で伝承されている牛深ハイヤ節を十八番とし、その踊りで日本民謡民舞大会の全国大会で準優勝した経歴を持っています。2016年の熊本地震の後に開催した、県立劇場の盆踊りで地域の人たちに踊りを指導したのも芳保先生です。

教室を指導する芳保先生が、日本民謡の世界に入ったのが、27歳の頃。校区の運動会で応援団を組むことになり、その指導を近所の踊りの先生にお願いしたことがきっかけでした。「特に踊りが好きとか、そうでもなかったのですが、どんどのめり込んでいきました。家族の理解があったからこそ、踊りを続けられたと思います」と当時のことを振り返ります。1983年に名取となり、熊本市内で教室を開くと、芳保先生の踊りに惚れ込んだ人たちが多く入門しました。勇壮な男踊りを得意とする芳保先生の踊りを見た後に、涙を流して帰った人もいたといいます。

年に一度は踊りの発表会を開いている芳保会は、今年40周年を記念した公演を県立劇場で開催予定です。「会が歴史を積み重ねていけば、当然ながらお弟子さんも高齢化しています。心穏やかに、踊る喜びに感謝して、みんなの力で40周年を祝いたい」との公演への気持ちを語ってくれました。



2018年に行われた35周年記念大会の様子



中山 芳保  
[なかやま よしほ]  
中山芳保会(民俗舞踊)

### 踊る喜びに感謝して 中山芳保会四十周年記念大会

とき:2023年5月7日(日)  
開場 11:30 開演 12:00  
ところ:熊本県立劇場 演劇ホール  
主催:中山芳保会  
入場料:2,000円  
お問合せ:090-5939-8704  
実行委員会事務局 小島





## 熊本県立図書館タイアップ企画 本の中にある劇場

熊本県立図書館と県立劇場のタイアップ企画として、2007年度から県立劇場の文化事業に関連する図書を「公演を楽しむブックリスト」としてご紹介しています。作曲家や演奏家のこと、楽器にまつわる話や演劇の原作本。さらにはスポーツ、科学に関する本も！そして、このコーナーでは、県立図書館職員おススメの二冊をご紹介します。ここでご紹介したおススメ本もブックリストの本も熊本県立図書館で読むことができますので、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。



著／川内有純 出版社／集英社インターナショナル

## 熊本県立図書館 情報支援課 主事 司書 松本 結【まこと ゆい】 目が見えない白鳥さんと アートを見にいこう

美術館の楽しみ方はいろいろとありますが、私は、作品を遠くからボーッと見たり、キャプションをじっくり読んだりしつつ気の向くままに進みます。見終わったあとに外の空気を思いっきり吸い込む瞬間の「久々に息を吸った〜！」という爽快感も好きです。

タイトルに惹かれたこの本は、全盲の美術鑑賞者 白鳥さんと一緒に国内外の美術館を巡った著者の体験が綴られています。晴眼者の生解説で作品を感じるのが白鳥さん流の「見る」なのですが、解説の正確さは求めておらず、むしろめちゃくちゃであるほどいいのとこと。複数人で鑑賞すると、同じ作品を見ても原っぱに見える人と湖に見える人がいて、会話がこんがらがっていく様子が面白いのだそう。

色のとらえ方や見えるようになりたけなどの友人の純粋な質問に答える自然体の白鳥さんに触れることで、個性としての障がいのとらえ方や自分の中の「見えない人への先入観」に気づくことができ、本を通して人に出会う不思議を改めて感じました。

## あなたの楽器見せてください 熊本交響楽団 フルート奏者 日野 栄理【ひの えいり】 ムラマツのフルート・ 山田フルート・ ピッコロ工房のピッコロ



日野 栄理【ひの えいり】  
熊本交響楽団フルート奏者  
熊本交響楽団の予定  
第112回定期演奏会  
日時 2023年5月14日(日)16時開演  
会場 熊本県立劇場コンサートホール



フルート  
ムラマツ18K  
ピッコロ(無響所有)  
山田フルート・ピッコロ工房  
ハンドメイド 木製ピッコロ

ムラマツのゴールドのフルートを使っています。フルートは洋銀製、銀製、金製、プラチナ製などあり、金製では9K、14K、18Kと数字が大きいほど金の含有率が高くなります。20代のころ3年間フランスに留学したのですが、留学前に頭部管だけ14Kに買い替え、気合を入れて渡航したのを覚えていますが、現在の楽器は18年前から使っています。

次の熊響演奏会はオールフランスプログラムです。中でもドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」ではフルートソロがとても重要な役目を担っています。このソロが吹けるのは一生に一度あるかないかのチャンスなので、悔いが残らないよう臨みたいと思います。

また、イベル「寄港地」ではピッコロに持ち替えます。ピッコロは北海道の山田フルート・ピッコロ工房製で、中音域がよく響く楽器です。

ほかにベルリオスやラヴェルも予定しており、熊響としてはチャレンジングなプログラムです。ぜひご来場ください。

## 県劇スタッフリレーコラム 総務グループ 永野 祐広【ながの ゆうひろ】 四〇TH

熊本県立劇場は、1982年に当時の公共施設としては珍しく音楽と演劇の2つの専用ホールを持つ劇場として誕生した。

2022年12月、県劇は40周年を迎えた。その少しだけ早く生まれた私は、県劇とは同級生である。実は、縁あって勤めることとなる6年前まで、この同級生との出会いは数回しかなかった。

私の所属は総務グループ。基本的にはパソコンに向かい、事務所の中で日々業務にあたっている。そんな中、普段の業務とは全く異なる動画制作の企画に深く携わるようになった。

劇場では開館40年の節目に記念事業を行い、様々な企画を実施してきた。そのひとつである「動く劇場〜Stories〜」というものである。

県内の文化遺産5つを舞台に、県にゆかりのあるアーティストとクリエイターの5つのチームが各々の舞台で動画を制作する。コンセプトは「メイド・イン・熊本」。



制作チームの一員となり、これまでほとんど関わることのなかったアーティストやクリエイターと接し、彼らのパフォーマンスや制作に対する姿勢や意識に触れたこと、各々の作品が生まれる場に立ち会えたことで、新しい発見や体験ができ、自身の大きな経験となった。

例えば、この動画制作の企画は、私だけでなく県劇にとっても新しい経験だったのかもしれない。

県劇40歳。たくさんの方が集い、その一人ひとりと共にどれだけ経験を重ねてきたのだろう。素晴らしい音が染み込んだ壁、期待や緊張が踏みしめられた床、感動や歓声の余韻が漂う空間を持つ県劇は、私の目にはとても大きな存在として映る。文化芸術に縁のなかった私が、たまにはあるが公演を観に行ったり、車にクラシックやジャズが流れるようになった。大きな同級生から少なからず影響を受けているようだ。毎日のように顔を合わせるようになったこの同級生と、この先も影響を与え合い、共に歩んでいきたい。

## 寄稿

開館40周年記念事業「動く劇場」  
(三角西港×マーチング)  
撮影監督  
株式会社 Hub.craft  
龍野 聖玄



「動く劇場」のお話を頂いたとき、制作される5つの動画作品のトップバッターであるとうかがいました。やはり最初に制作される作品では、その後制作される作品のクオリティのベースを作り、後につなげる勢いが必要ですね。そこで私たちは、今回のテーマ「動く劇場」を、私たちが得意とする「LIVE感」で表現しようと考えました。

私たちが担当した「三角西港×マーチング」は、5つある動画の中で最も関係者数が多く、撮影時間やロケ地の広さなど、撮影を進めるにあたっていくつかの壁がありました。しかし、私たちは幸運なことにフリーランスのクリエイター集団です。必要なタイミングで必要な人材を集め、現場ごとにプロフェッショナルのクリエイターチームを結成。1伝えれば10伝わるチームワークと現場力によって、それを乗り越えていくことができました。

撮影で特に印象に残っている瞬間は、専修大学熊本玉名高等学校の吹奏楽部「Ventures」の皆さんの撮影シーン。その実力と対応力、そしてキラキラした表現力によって「LIVE感」を表現することができたと思います。また、ロケ地の世界遺産三角西港の関係者の皆様の多大なご協力もあり、広大な敷地をフル活用させて頂いたことで臨場感ある映像も撮影できました。

歴史ある三角西港を背景に繰り広げる、「Ventures」の圧巻のパフォーマンスが創り出す現場のワクワクドキドキの空気感、そして私たちがこだわった「LIVE感」をどうぞご覧ください。



動く劇場〜5 Stories〜  
三角西港×マーチング篇